

シンポジウム提言

テーマ「いのち・多様性を尊重し支え合い、自分らしく生きることを認め合う学校づくり」設定の理由

コーディネーター

福井 真実

関市小中学校教頭会代表
(関市立富岡小学校教頭)

昨今、社会の大きな変化に伴い、子供たちを取り巻く環境は多様化・複雑化しており、いじめの重大事態や自殺、また不登校等、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増加傾向にある。

関市においては、不登校児童生徒数の増加が顕著であり、その要因として、無気力や自己肯定感の低さなどが多く見られ、メンタルヘルスの問題解決が喫緊の課題となっている。また、LGBT フレンドリー宣言発出後の令和3年7月に実施した「性同一障害等に係る対応に関する状況調査」においては、児童生徒及びその保護者から性同一性障害や性別違和感に関する相談があった学校の割合は小学校31%、中学校69%と、学校における性的指向や性自認等、いわゆる性的マイノリティへの対応についても見逃すことのできない課題となっている。

これらの児童生徒の実態を踏まえ、「ふるさと関に誇りをもち 豊かな心で 未来を切り拓く人づくり」を基本理念に掲げる関市の学校教育においては、基本方針の1つである「多様性を尊重し、豊かな心を身に付ける教育」を実現すべく、児童生徒が担任以外にも相談できる教職員を選ぶマイサポーター制度による個に寄り添った対応や校内フリースクール（L教室）のモデル設置による不登校支援、トランスジェンダー等自分の気持ちに合った制服を選択できる市内全中学校における制服変更を行ってきたところである。

関市学校保健会においても、こうした児童生徒の心の健康問題の解決や性的マイノリティの児童生徒への支援（配慮）が適切になされるよう、研究主題を「未来を切り拓く豊かな心・健やかな体を育む学校保健」とし、①心の健康を重点とした、自他の「いのち」を尊重し、「いのち」の豊かさを育む教育、②性の多様な在り方の理解を重点とした、多様性を互いに理解し尊重する心を育む教育に、学校保健会の強みである学校、家庭、学校医等地域の専門医療機関等の連携を強化した「チーム学校保健」が機能するよう取り組むことにより、学校保健の観点からの学校づくりへの参画を目指すものである。

シンポジウムにおいては、テーマを「いのち・多様性を尊重し支え合い、自分らしく生きることを認め合う学校づくり」とし、学校、学校医、PTAそれぞれの立場からの実践を発表することにより、心の健康及び性の多様性に係るこれまでの取組の成果と課題を学校保健会として共有するとともに、関市内児童生徒が自分のよさや可能性に自信をもち、他者を尊重し多様な人々と協働して豊かな人生を切り拓いていくための今後の取組の方向を明確にしていきたい。

性同一性障害の児童生徒に対する学校、家庭、医療機関の対応

シンポジスト 真鍋 孔透

武儀医師会・関歯科医師会・関市学校薬剤師会代表
(真鍋内科院長)

性同一性障害の診断は容易ではなく、また症状の程度の差や個人差も大きいいため、対応を単純にマニュアル化できるものではない。事例ごとの個別の対応が必要となる。例えば、人前で着替えることを嫌がる男子児童がいた場合、医療機関に受診してもすぐに診断がつくわけではない。当該児童に寄り添って繰り返し話を聞き、着替えに対する配慮を行いつつ保護者に事情を説明し、まずは学校と家庭で連携し時間をかけて対応することが重要である。ただ、性同一性障害の場合、不登校、引きこもり、自殺企図などの問題を起こすことがあり、このような場合は速やかに学校医やかかりつけの小児科に受診を促し、そこから必要に応じ専門医療機関へ紹介することが必要となる。また、性同一性障害の児童、生徒に対する対策として、全ての児童生徒に中性的であるよう求める対応は避けるべきだ。小中学校を通じて男子が「男らしく」、女子が「女らしく」なることは健全な発育に他ならないからだ。「男らしさ」「女らしさ」を尊重しつつ、性同一性障害の児童生徒が苦しまないよう、様々な場面で性別にとらわれない選択を可能にし、またそれを周囲が快く受け入れる雰囲気を作ることが重要である。

「自己肯定感を育む家庭教育」保護者の学びの共有と推進

シンポジスト 古川 雅志

関市PTA連合会会長

多様性を尊重し合い自分らしく生きていくためには、「ありのままの自分を肯定する（認める）こと」＝『自己肯定感』の育ちがとても大切だと考える。子供たち一人一人の『自己肯定感』の育ちはもちろんだが、一方で保護者自身が子供の気持ちに寄り添い理解しているか、他人と比較して子供を評価してはいないかという疑問を感じる。

そこでPTAでは各学校のPTAで子育てサロンを開催し、『自己肯定感』とは何か、どうしたら育むことができるのかなど、保護者自身が学びを共有したり、関市PTA連合会家庭教育学級の中で、『自己肯定感』を育むことができるような講演会を開催したりしている。保護者自身の学びの一步ずつの積み重ねが、子供たちの心の育ちに繋がっていくと信じて取組を続けていくこと、学びの歩みを続けていくことが重要だと考える。

多様化し複雑化した現代社会の中で、学校・地域・専門機関・家庭の連携が益々重要となっている。PTAとして心の健康に関わる取組を進めながら、常に前進し、保護者自身も子供たちと共に『自己肯定感』を感じられる存在でありたい。

「いのち」と「多様性」を尊重する学校経営

シンポジスト 加藤 小百合

関市小中学校校長会代表
(関市立武儀小学校校長)

複雑化・多様化する様々な健康問題等により、不登校等となる児童生徒が増加傾向にある現状においては、性の多様性を含めた心の健康問題を不登校、いじめ、自殺予防教育等につながる現代的な学校課題として捉えた学校経営が必要である。

各学校では、自殺予防の下地づくりの教育を基盤とした「心の健康」教育の充実と信頼関係づくり、相談しやすい雰囲気づくり、居場所づくり等の環境づくりを学校経営の重点に位置付け、カリキュラムマネジメントの観点から教科横断的な視点で教育課程を編成し実践してきた。また、人権課題に位置付く性の多様性の理解についても、制服変更を通して生理的側面、心理的側面、社会的側面の3つの側面から、道徳や各教科、特別活動等の関連を図るとともに指導内容間の発展、学年間の系統を踏まえた指導計画の作成と実践を積み重ねてきたところである。さらに、これらの指導に当たっては、PTA や学校医等の専門医療機関等、学校保健に係る地域人材の有効活用を重視し、「チーム学校保健」として問題解決に取り組むことを大切にしてきた。

こうした実践の成果と課題を、関市小中学校長会として共有するとともに、特に性の多様性については、教職員の一層の理解を図り、自身のジェンダーアイデンティティに悩み苦しむ児童生徒に寄り添い、誰もが自分らしく生きることができ学校づくりのための課題を「チーム学校保健」で解決していきたいと考えている。

心の健康・性の多様な在り方に係る学校保健安全委員会の充実

シンポジスト 今井 克己

関市小中学校保健委員会代表
(関市立博愛小学校保健主事)

不登校やいじめ、自殺等につながるメンタルヘルスの問題の解決に当たっては、学校だけでなく家庭や地域の関係機関等との連携が必要不可欠である。とりわけ性の多様な在り方に係る不安や悩みに対しては、通常の教育相談のみならず、学校医等の医療機関との接続や連携が重要と考える。そこで、学校保健安全委員会が関係者による「チーム学校保健」として十分に機能することで、複雑で多様な心の健康問題や性的マイノリティに係る問題解決の一助としたいと考え、学校保健安全委員会の仕組みをモデル化、その実践を進めてきた。

学校保健安全委員会のマネジメントを役割とする保健主事は、養護教諭との連携を密に保健室経営及び学級経営の観点から、保健室への来室、健康診断、心のアンケート、日常の観察等で把握した児童生徒の心身の健康状態を報告、課題を提案し、委員会内で討議、学校医等からの指導・助言を受ける。そして、今後の指導の方向に基づいて保健管理・教育や健康相談、学校内における特別活動や教育相談、さらにはPTA活動等へフィードバックできるよう問題解決への方策を企画・提案するものである。

「チーム学校保健」は、児童生徒を取り巻く現代的な健康課題が多様化・複雑化する中で、学校内外の保健関係者がそれぞれの役割を明確にしたうえで必要となる連携を図り、児童生徒の健康課題の解決に向かう極めて重要な任務を担うものである。

心の健康問題を抱える児童生徒への対応

シンポジスト 鈴木美奈子

関市小中学校教育研究会養護教諭部会・栄養部会代表
(関市立富野中学校養護教諭)

学校においては、児童生徒が夢や希望をもち、学校生活によりよく適応できるよう支援することを目的に健康相談を行っている。しかし、近年、心の健康問題が複雑化・多様化しており、市内小中学校養護教諭への調査結果からも、LGBTQ+を取り巻く問題を含め、様々な心の健康問題に苦しみ悩む児童生徒が増加傾向にあることが明らかになった。こうした児童生徒は不調を訴え、保健室を利用するケースも多く、養護教諭は心の健康問題を発見しやすい立場にあり、早期発見、早期対応に果たす役割が大きい。

しかしながら、養護教諭をはじめ、学級担任など校内関係者だけでの対応には限界があり、医療の支援を必要とする事例も増えていることから、児童生徒の心の健康問題を解決するには、専門医療機関と連携を図ることが必要不可欠である。

学校において医療的見地からの対応が必要と判断した場合は、学校三師と連携し、地域の医療機関から専門医療機関への受診や治療につなげることを視野に入れた対応が必要である。そのため、養護教諭はその予見や判断ができるための児童生徒本人のみならず、その保護者や家庭環境等をも「観ようとする眼」をもちたい。学校保健安全委員会や日常の学校三師への情報提供、指導助言を得て医療につなぐ体制を確立することが重要だと考える。

関市の実態を踏まえた「性の多様性の理解」への取組

シンポジスト 松田 香織

関市中学校制服変更「夢プロジェクト」生理的側面部会代表
(関市立緑ヶ丘中学校養護教諭)

夢プロジェクト「生理的側面部会」では、関市の全教職員を対象に実施した「性的指向・性自認に係る対応状況調査」から現状を明らかにし、実態を踏まえた内容を盛り込んだ「教職員向け指導資料」の作成に取り組んだ。

関市の取組の現状としては、①教職員の性的指向・性自認等に関する正しい知識や認識が不足していること、②支援や配慮が実施されつつあるものの対応はまだまだ限定的であること、③授業等での多様な性の在り方に関する内容の取り上げが増えてきているが、実施には教職員間に差が生じていることの3点に整理できた。

現在、各校では現状を踏まえ、①性の多様性の認識の向上を目指した授業や職員研修の実施、②本人の意思を尊重したきめ細かい対応や支援の実施、③他者を尊重できる人権感覚を養うことができる環境づくりに取り組み始めたところである。

今後は、各校で指導資料を活用しながら、多様な性の在り方についての理解を一層深め、児童生徒一人一人が自分らしく安心して生活できるよう、さらなる取組の充実の必要性を提案したい。